

小さい頃に読んでいた絵本が家族構成の固定概念を作り上げたのではないかと

3年1組21番 原陽菜
3年1組31番 山根凜珠

1. はじめに

オーストラリアでの留学を通して、小さい頃に読んでいた絵本が家族構成の固定概念を作り上げたのではないかという説を思いつき、興味を持ちました。オーストラリアでのホストファミリーと日々過ごしている際に、3歳と1歳の子達に毎日絵本を読むことがルーティーンになっていきました。ホストファミリーは私のいとこの家族で、いとは日本語を話すので、読む絵本は日本語と英語どちらもありました。その中で私は英語の絵本と日本語の絵本の内容の違いに気づきました。日本語の絵本では昔話が大切にされていることもあり、家庭のお話ではほとんど全部と言っているほどお母さんはお家で家事や子育て、お父さんは家を出てお仕事に行くという家族構成の設定が基本になっています。一方で英語の絵本の中にはそのような設定ではなくシングルマザーの家庭のお話など色々な家族構成のお話がとても一般的に読まれていて、たくさんの人達に親しまれています。そこで私は、小さい時に読んできた絵本などで固定概念が形成され、昔話などが親しまれている日本では父が大黒柱、そして母と子供という家庭構成が一般的だと考えられ、一方英語圏では様々な家族構成が一般的に認められてきて、LGBTQの面でも進むのがすごく早く、日本が置いていかれているという状況が続いているのではないかと考えました。

2. 序論

私たちの探究の問いは「小さい頃から馴染みのある絵本で固定概念は形成されるのか」です。日本と海外での絵本の違いなどを発見し、そこからの固定概念の形成に違いがあるのかを考えました。とくにLGBTQを取り扱っている絵本に焦点を当てました。調べたところオーストラリアやカナダでは日本と比較するとLGBTQの内容を取り扱っている絵本の割合が多いです。例えば「A Kids Book about Pride」、「The Every Body Book」などがあります。それに対応し、LGBTQが受け入れられている国のランキングではアメリカオーストラリア、カナダはLGBTQ RIGHTの Equality Indexが高く日本は70以上あり、日本は53で比べると差があります。さらにlegal Indexもカナダアメリカオーストラリアでは80以上の数値であり、日本は50ほどです。**(Equaldex: LGBT Rights by Country & Travel Guide <https://www.equaldex.com/> より引用)**この数値から児童書がLGBTQへの子供たちの固定概念や偏見が形成されているのではないかと考えました。

3. 本論

私たちは日本の児童書でLGBTQに関するものが少ないことに気づき、自分たちで作ってみることにしました。タイトルは「ふたりのおかあさんとじいらのやくそく」で、お母さんが二人いる家の絵本を作りました。そこで子供は「どっちが本当のママなの？」とお母さんたちに問い続けます。お母さんたちはどちらも子供を愛していることを伝え、さまざまな家庭の形があり、どんな形であってもお母さんたちは子供を愛している、という内容です。絵本作成時の意図としては、「どっちが本当のママなの？」という問いは、絵本を読む子供たちは同世代の子供であり、より親近感が湧き、内容に入り込みやすいと考えました。

この絵本を従兄弟の子達に渡しました。その子達は「お母さんふたりいるの面白い！」と母が二人いる家庭に対して肯定的に捉えてくれました。固定概念や自我が形成される前の子供たちは、様々な家族の形を比較的容易に受け入れることができると思います。

なぜなら、まだ世の中の偏見などに染っていないからです。なので小さい頃から、様々な家族の形をあたりまえだと思える環境を作ることが大切だと思います。



「ふたりのおかあさんとにじいろのやくそく」

4. 結論

日本にLGBTQの絵本が少ないのは、日本ではまず同性婚が許されていないことなどLGBTQの受け入れが広がっていないことが問題です。その中でもLGBTQの人々は数多く存在しているため、幼少期の頃からその現状が当たり前であることとして子供たちには捉えて欲しいです。今回でわかったことはLGBTQの内容の絵本でも肯定的に捉えてもらえるということです。固定概念が形成されるのは絵本であることは私たちの探究になりましたが、調査によってLGBTQの受け入れ度が高い国では、LGBTQにまつわる児童書の冊数も比例して多いです。さらに調査から日本のLGBTQの受け入れ度は低く児童書の冊数も少ないです。日本でLGBTQの児童書を見かけることは少ないと思います。それは今の日本の現状からそうなっていると推測しています。日本の法律が変わらない限り、LGBTQの児童書が飛躍的に増える可能性は低いと思いますが、LGBTQに関わる児童書を作り、子供たちの見据える世界を広くしてあげることが課題だと思います。

5. おわりに

さまざまな家庭の形や在り方は、これから増えていくものであり、絵本で固定概念を形成するには補えない部分がでてくるので、人々に必要なものは柔軟な考え方をする能力です。なので、子供たちは柔軟な考え方や偏見を超えて人と接する姿勢などを大切にすべきであると考えました。児童書ではこれらの壮大な内容をテーマにすることは難しいです。多様性とは私たちが把握しきれるものではありません。自分が想像できる範囲の多様性だけを考えて、自分は多様性を理解していると主張することは良くないです。そして自分が理解をしてあげる側だということを無意識のうちに確信することも良くないです。多様性とは扱い方が難しいものであり、安易に多様性という言葉を使うことは良くないです。私たちに出来ることは柔軟な考え方をもち、何に対しても肯定的に捉えるということです。

6. 参考文献・出典

Equaldex: LGBT Rights by Country & Travel Guide

<https://www.equaldex.com/>(Retrieved date:October 2nd 2025)